

【原著論文】

新体操における美の理論に関する一考察

—採点規則との関係において—

浦谷郁子

体育原理研究室

A consideration on the theory of beauty of rhythmic gymnastics

—In relation to the code of points—

Ikuko URATANI

Abstract: This research discusses the issues about the aesthetic theory concerning rhythmic gymnastics, mainly from the perspective of its rules and clears up that rhythmic gymnastics is a sport that places emphasis on rhythm and beauty.

As a result of the discussion, the following issues were revealed, and it was confirmed that rhythmic gymnastics is a sport that places emphasis on rhythm and beauty.

According to the code of points of rhythmic gymnastics, the targets for evaluation are degree of difficulty, artistic quality and practice. However, the performance structure consists of a combination of the difficulty of each element, so that all elements are understood as “degree of difficulty.” In other words, all elements are evaluated mainly based on the “difficulty element” of each element, and as a result, biases occur in scoring. Furthermore, it was revealed that physical flexibility is deeply involved in the degree of difficulty.

(Received: October 12, 2010 Accepted May 9, 2011)

Key words: rhythmic gymnastic, rule, beauty, artistic, rhythm

キーワード：新体操, 採点規則, 美, 芸術, リズム

1. 緒 言

1) 問題の所在と本論のねらい

新体操において特に美について問題視され始めたのは、シドニー・オリンピック大会（2000年）の後であった。その問題が起こった背景としては、2002年新体操採点規則（以後採点規則とする）があげられる。それまで特に問題視されたのは、満点に近い選手が多発し、順位を決めることが困難になったという点である。したがって、2002年採点規則はその問題を解消しようとするものであったと考えられる。そこではまず、評価基準が定め易いとされる、ジャンプ、バランス、ピボット、柔軟（これらの用語は、新体操の世界で一般化されていることから本論ではそのまま使用することにする。）といった身体能力に関わる難度要素と巧みな手具操作要素や投げ技の要素に注目が集まった¹⁾。

その結果、身体能力に関わる難度要素、投げ要素、

プレアクロバット要素が組み込まれた演技を多くの選手が行うようになり、芸術・美的要素が軽視され始めた。そして、このような傾向はマス・メディアから「これは新体操ではない」と、バッシングを受けるなど、厳しい批判を受けるに至った。新体操では北京オリンピック大会（2008年）以降、これらの問題を解消すべく、再度採点規則の抜本的見直しを行うことになった。その最も大きな変更内容は芸術点、すなわち「美」の評価を重視したことである。

改正後の採点規則における芸術項目は、「演技における芸術構成の主要な目的は、観客に感情を伝え、表現のアイデアを伝えることであり、これには伴奏音楽、芸術的イメージそして美しい身体の表現性といった3つの側面が利用され、つくり出されていること」²⁾と定義されている。ここでのキーワードは、音楽、芸術性、表現性である。つまり美は、決められたものではないからこそ、抽象的かつ感受性が求められることば

で語られている。しかし、現実に芸術の評価は、細かく点数配分されていることから、感じたままの評価が下され難い。つまり現状の採点規則は、この点で大きな混乱を招いている。これらの問題は次のように整理される：

① 新体操における芸術の捉え方に対する問題

新体操はリズムと身体的動作が融合された1つの芸術である。したがって、採点規則においてはこのことを最も重視しなければならない。具体的には、音楽、身体動作、手具動作が融合され、1つの芸術作品として表現されなければならないし、その点に重きを置いて評価基準が整理されなければならない。だが、現状では難度要素に重きを置いている。

② 芸術性の評価システムの問題

芸術性の評価は極めて個人的で多種多様なものであるにも関わらず、その評価システムを統一的にまとめている点である。更に、芸術性は本来観る人(審判員)が直接感じるものであるが、現状の採点規則では、その都度感じる度合いに応じて「加点」すべきところを「減点」する制度になっている。

③ 要素難度設定の問題

難しさの基準(難度)設定に問題がある。具体的な問題としては、極度な柔軟性(非健康的で不必要な力)との関係で難易性を求めている点である。

これら3つの問題を抜本的に解決するためには新体操における重要な課題の1つである「美」の追求が軽視されている点を真に認識しなければならない。更に、新体操の原語が「Rhythmic Gymnastics」(以後RGとする)であることからリズムに合った動きや手具を巧みに操作すること³⁾の点も配慮されなければならない。ようするに、新体操は美とリズムが欠かせない重要な要素であるということだ。それ故、評価基準の設定において「美」と「リズム」は大きな役割を果たすべきである。

よって、本論のねらいは以上のような問題点について主に採点規則との関わりにおいて考察し、新体操が実施される演技のリズムと美を求めることを殊更重視したスポーツであることを明らかにしようとするものである。

2) 「新体操」の成り立ちと用語について

新体操の始まりは、リズム体操と表現体操が統合され、それらが調和した動きの美しさが追求されたものである。そうした背景には「体操」、つまりギムナステイク(Gymnastik)とツルネン(Turnen)の2つの系譜が大きく関与している。具体的には、新体操はギムナステイクとして19世紀末から20世紀初めにかけて発展を遂げた⁴⁾。そして、そこには医学的側面

からみた体操や、感情の表出を重視した表現体操、音楽と運動を結合させたリズム体操、更には新たなダンス的発想に基づく芸術体操などが深く関わってきたとされている。ここから競技化するための規則が徐々に定められ、ロープ、フープ、ボール、クラブ、リボンを使った手具体操が、東欧諸国において普及し、著しく発展し、1950年代にスポーツ競技化した⁵⁾。そして、1963年「Modern Gymnastics」として第一回世界新体操選手権大会が国際体操連盟(以後FIGとする)の主催でブタペスト(ハンガリー)において開催された。

新体操が世界に進出してから10年後「Modern Rhythmic Gymnastics」と改名され、新体操の特徴でもあるリズムが加わった。更に、1977年にはModernがなくなり「Rhythmic Sportive Gymnastics」とされ23年もの長きにわたり親しまれた。筆者は、この23年間に本論で問われる新体操と芸術の関係についての問題を解くカギがあると考えている。なぜなら、1995年までは、その当初から重要視されていたリズムと動きの一致に対して高く評価されていたからである。つまり、新体操の特徴には「芸術的要素」が必須条件であるということだ。だが、名称にスポーツが加わったことで、その後の過程において、よりスポーツを意識した規則を求め始めたのである。

そもそも、体操とスポーツは異なった歴史をもち、異質なものである。体操は、ドイツやデンマークで発祥し、芸術を基盤にした人間づくり(教育)を意図して発展した身体運動である。一方、スポーツはイギリスで誕生し、ボールゲームを中心に競技、競争として楽しまれていた。だが、新体操は時代とともに体操的要素から徐々にスポーツ的要素に変わっていったものであると捉えることができる。その実例として、アトランタ・オリンピック大会(1996年)後、高難度要素を多く実施した選手に高い評価がなされた。このことはまさに、現在の新体操における芸術要素の捉え方が混乱しているという点の先駆けであったといえよう。

しかし、シドニー・オリンピック大会(2000年)開催の年には、「RG」として試合が開催された⁶⁾。このように名称が改正される意味は、新体操がスポーツのカテゴリーにありながらも「リズム」と「体操」の2要素がその中心的な役割を果たしているということである。ところが、現状の新体操をみる限り、名称が変化することに特別な意味を持たせていないと言わざるを得ない。なぜなら、2001年採点規則では、よりスポーツを重視した採点規則に変わり、そこでの評価基準が競技名変更の意図とは程遠いものであるからだ。

我々は、このように競技名に限らず、ことばの真の意味を普段誤って使用している場合が多い。例えば、新体操界における「技術」である。本来の意味では「あ

る物事を上手にやりとげるわざ」⁷⁾、それはつまり手段や方法の意味であるにも関わらず、その「技術」の意味を「難度」と混同して表現している。

新体操の本来の目的でもある芸術性を規則に多く取り込むことが必要であるならば、ことばの定義から考え直す必要がある。そのことは、芸術ということばが哲学的であるからに他ならない。

これまで、新体操は時代の変化とともに採点規則が改正されてきた。そこでの基本的な考えは、新体操がより良くあるためであったに違いない。しかしながら、現実には競技スポーツの特徴の1つである勝利至上主義の考えに流されてしまったのである。つまり、採点規則ではより明確な順位を定める規則が求められたということである。新体操は芸術競技でありながらも、スポーツとしての性質が大半を占めつつある。よって本論では、採点規則の抜本的見直しのために、主に新体操における芸術について哲学的視点から問い、現在の新体操の問題点を明確にするという課題も担っている。

3) 本論の方法

最近、新体操の世界では選手、コーチにとって重要なトレーニングの指針ともなる採点規則が大幅に改正された。そのことによって、新体操に関わる人に、新体操の本質に関わる考え方で混乱を抱かせているといっても過言ではない。この混乱は一時的なものであるかも知れないが、少なくとも直接関係ある選手をはじめ、多くの関係者にとって喜びを実感できるものではないだろう。

本研究は、まさにそうした仮説のもとで進められることになるが、その混乱の中心は新体操の特徴でもある芸術性の美の評価の基準にある。競技大会における具体的な問題点として1つ挙げると、芸術性に定評のあるベツソワ選手⁸⁾が芸術点で高得点を得るものと考えられるが、2009年世界新体操選手権大会では、難度要素に優れているカナエワ選手⁹⁾が芸術点でもベツソワ選手より上回るといった現象が起きている。つまり、芸術性は正しく評価されていないということである。このことについては、FIGも報告書¹⁰⁾で指摘している。

本研究のねらいは、新体操が演技のリズムと美が殊更強調されるスポーツであることを明らかにしようとするものである。そのことを検証するための方法として採点規則の中で表現されている、難度・芸術・実施がそれぞれ違った尺度で評価基準が定められているかどうかについて主に哲学的視点から検討しようとするものである。

4) 先行研究の検討

新体操における研究の主流は、難度要素向上のための測定や比較などである。この領域では人文系の研究は少なく、特に哲学的視点から捉えたものは数少ない。唯一、滝沢が体操競技の難度について哲学的に検討を加えているが、そこでは特に男子体操競技を対象としていることから本論との違いが明らかにされている。また、本論のキーワードである芸術は哲学的思考を抜きにしては語れないことばの1つである。したがって、今日の新体操で問題意識の高い芸術性について、哲学的視点から論じることには大きな意味があるといえるだろう。

2. 新体操と規則についての関係性

1) FIG規約との関わり

新体操は、体操全般を国際的に統括するFIGに位置付けられている一競技種目であり、英語ではRGと表記されている。FIGには総会の他、会長、副会長を中心とする執行部会、理事会、新体操を含む7つの技術委員会が主たる会議体として組織されている。そして、総会を除く会議での議決権をもつ者は、総会で選出される仕組みになっている¹¹⁾。特に、本論に深く関わる場所の採点規則は、それぞれの技術委員会で原案がつくられるが、その執行には理事会の承認が必要となる¹²⁾。つまり、それぞれの部門で選任された7人のFIG技術委員は、採点規則の原案作成の他、その管理と、国際審判員の養成という重要な課題も担っている¹³⁾。

FIG規約は、3つの規則のうち最も基礎になるものでFIGの存在理由そのものを示す役割を担っている。そして、この規約はFIGの親団体である国際オリンピック委員会が策定されたオリンピック憲章の精神を受けている。

FIGの創立は1881年で、あらゆるスポーツ団体の中で最も古い歴史をもっている。そのFIGが設立された当初からあった男子体操競技(1903年に初めて世界選手権大会を開催する)を筆頭に、およそ50年後に女子体操競技が加わり、その約20年後に一般体操(General Gymnastic=1953年、第1回世界体操祭=World Gymnaestradaを開催)が加入した。なお、FIGでは一般体操の英語表記を2007年よりGeneral GymnasticからGymnastic for allに改名している。新体操部門はそれから10年後の1963年に初めてFIGのもとで世界選手権大会が開催される運びとなった。更にそれから30年以上も過ぎた後にトランポリン{シドニー・オリンピック大会(2000年)の公式種目となる}とエアロビクスが、そして1999年にアクロバット体操が初めてFIGのもとで世界選手権を実施している¹⁴⁾。ちなみに、FIGに位置づけられているすべての競技体操には「芸術性」

が評価の対象になっている。なお且つ、新体操にだけ具体的な評価システムとして「芸術性」が位置づけられたのである。

しかし、最近の新体操には上述したような競技特性である「芸術性」を活かした規則は、演技や競技会から見出せない。このことは、「そもそも、新体操が持つ競技特性とは何か」という根本的で且つ極めて重要な疑問を抱くほど深刻な問題であるともいえよう。つまり、新体操を想像する多くの人は、美しさや優雅な動きを求めるものであり、しかもその想像は個人的であるということだ。

この極めて重要な事柄が本格的に分析されることはなく、曖昧なかたちで理想像がつくられてしまったといえよう。このように、新体操の競技特性が正しく認識されていないということは、ある意味、今日の採点規則そのものに原因があるともいえる。これはFIGの技術委員会が解決することであり、それを前提に新しい採点規則がつくられるべきであるが、責任ある立場の人たちがこのような問題の原点に意識が向かないということもその根源的理由であるのかも知れない。いわば、FIGの技術委員会のすべての人がこの問題に目を向けなければ、解決策が話し合われることはないということである。

FIGの規約と競技規則、そして採点規則との関わりは密接なものである。更に、FIGに他競技が所属していることは新体操に限らず、加入している競技すべてにおいて競技の本質を見失うことなく、マンネリズムをも防ぐことができるものでなければならぬだろう。おまけに、そこではそれぞれの競技の特性を明確にし、競技種目間の差異をはっきりさせなければならない。

FIGが競技大会を開催するのは、FIGの目的を達成するための重要な手段である。FIG関係者が真にこの意味を理解して行動することは殊更重要なことである。そのためにはまず、手を取り合って正しい議論をすることが求められよう。

2) 競技規則について

近年、スポーツの捉え方は多岐にわたり、体を動かしてする「競技スポーツ」と、誰でも気軽にできるいわゆる「大衆スポーツ」の両者の関係が混じり合い、豊かなスポーツ文化を形成している。そして、今日のスポーツを考える場合、マス・メディアによるスポーツ情報を無視することはできないのである。そこではごく必然的に視聴者は、競技スポーツに記録や成績を求めようとする。ここからまず、スポーツ界で起こっている諸問題の根源を探ることができる。

スポーツということばは「からだ (the body)」では

なく、「こころ (the mind)」であったとされ、スポーツ概念の内包として、①遊戯、②闘争、③激しい肉体活動の3つが挙げられている¹⁵⁾。つまり、それは現在の「競技スポーツ」概念以上に幅広いかたちでスポーツは親しまれていたということである。更に加えるなら、スポーツの本来の姿はあそびであり、競技化したのが競技スポーツであると思慮できる。なぜなら、競争はあそびをよりエキサイトさせる要素をもっているからである。そして、その要素はそれぞれの競技スポーツによって異なった特徴を持っている。その差異を持つために、どの競技スポーツ種目にも規則がある。

しかし、観客や視聴者がその競技規則を知ったうえで記録や成績を見ようとすることは少ない。この傾向は、指導者や選手にまで見られる。スポーツの競技規則は、まず、そのスポーツを他のすべてのスポーツ種目と区別するために存在しているといつてよいだろう。また競技規則は、当該スポーツで競争する者同士に不公平が生じないことにも配慮している。

3) 採点規則について

採点規則で最も重要な課題は、新体操というスポーツで「何を競争しているか」という点をより鮮明にすることであろう。

新体操は、体操競技と同じように「採点競技」に分類されている。その採点競技に位置づけされる競技スポーツには体操競技の他に代表的なものとしてシンクロナイズドスイミングやフィギュアスケートがある。そこでは、どれも共通して「美しさを競う」ことが特徴として挙げられる。しかし、同じ採点競技といえども、採点方法に明らかな違いがある。

新体操の場合、満点を30点とし、それぞれ10点ずつ次の3評価要素に配分されている。

- ① 芸術的価値 (音楽、身体や手具要素の選択要素など)
- ② 実施 (音楽と動き、身体や手具の正確性など)
- ③ 難度 (身体要素 = ジャンプ、バランス、ピボット、柔軟)
(手具要素 = 投げ技、手具の独創性など)
(難度点の算出は、身体と手具の要素点を足して2で割る)

これら3評価要素は、新体操で競争している3つの重要な要素であると理解されなければならない。そして、そこでは評価の基準がそれぞれ定められていることが重要である。

新体操の評価基準は、採点規則が改変するたびにそこでの内容が細分化されつつある。その意図するところは、より厳密に、そしてより客観的に評価しなければならない、という点にみられる。

4) まとめ

どの競技スポーツにとっても規則は絶対的なものである。なぜなら、それは競技そのものを成立させる基盤だからである。もし規則に沿って競技が行われなかった場合は、そこでたとえ新記録が出たとしてもその記録は破棄される。つまり、そこに存在する諸規則は当該競技スポーツの存在価値に大きな影響を及ぼす重要なものであるということだ。

新体操に関わる諸規則は、FIGが定めたものであるが、その改訂に当たっては当然のことながら規約、競技規則、採点規則の関係をみながら、先ずFIG全体のその時点までのさまざまな問題を踏まえて議論がなされ、その結果がそれぞれの規則に反映させられるということである。

FIGにおけるどの採点規則も大本の規定である規約は、競技規則に基づいて検討されなければならない。しかし、採点規則の改訂を見る限り、そのようなプロセスを十分に踏んで改訂作業が行われたのか、疑問が残る。たとえば、シドニー・オリンピック大会（2000年）後にみられた採点規則改訂の特徴は、選手の身体的・技術的能力が向上したことにより、現状のような「身体の要素」を評価する基準が細かく点数配分されたことである。つまり、過度な柔軟性が主流となり、不健康的な動作が増えたという問題が浮上したといえる。

筆者は、自らの新体操経験から鑑みて、このような考えは少なくともFIGのもつ目的に符合するものではないと認識している。また、この改訂により、新体操に対する世界的な印象が大きく変わったといっても過言ではないだろう。更に、この改訂は新体操を徐々に本来在るべき新体操からかけ離れたものにつくり変えているということもできる。一方、この改訂を取って肯定的に捉えるなら、時代が生んだ新しい新体操ともいえるのかもしれない。しかし、筆者は新体操関係者の一人としてこの状況を見逃すことはできない。

なぜなら今日、新体操関係者に限らず、多くのマス・メディアからも、新体操に芸術性が失われつつあるという懸念を抱かれているからである。その背景を考えると、新体操の芸術性の評価基準が細かく分類されているにも関わらず、曖昧であるということが見えてくる。FIGのもつすべての競技体操には「芸術性」の要素はつきものである。その意味するところは、芸術性に対する評価を採点上極めて重要なこととして捉えているということである。

新体操は「芸術競技」であると認識されている。よって、ことばで表すことが困難なものを音楽と身体が一体になった演技により表現されるものである。つまり、ことばを十分持ち得なかった古代人が求めていた芸術

性とされる、感情が最も高く評価されるべきである。しかし、採点規則に曖昧な要素が存在することは更に混乱を招く可能性が高い。このようなことも、新体操界で「芸術性」について問われなければならない由縁のひとつであろう。

3. 新体操における美について

1) 新体操における難度と美の関係

新体操競技は、上述したように、審判員による採点規則に基づく評価によって、優劣が決定される競技である。その採点方法は、難度10点（身体の要素10点+手具の要素10点）÷2、芸術10点、実施10点からなる30点満点で評価される。このように3項目は、全て同等の価値を備えている。いわばそれらが、新体操で最も必要としている要素であるということだ。だからこそ、項目ごとに異なった役割が存在することが望ましいとされ、3要素が均一に最終得点に絡んでくるよう評価設定が組み込まれていると考えられる。新体操の難度項目は、身体の要素と、手具の要素の2つによって構成されている。

身体の要素は、ジャンプ、バランス、ピポット、柔軟の4要素から成り立っている。シニア¹⁶⁾の場合は、各手具における必須の身体のグループ(GOC)¹⁷⁾を決められた数、演技に入れる必要がある。その身体の要素では、それぞれに基礎的特徴があり、その決まりは細かく記載されている。

たとえば、形が明確かつ大きさがあることさらに、後屈を伴った演技(ジャンプ)要素に関しては、その足または脚の部分が頭についてなければならないことである¹⁸⁾。他にも、形(フォーム)に対する決まりが細かく書かれている。つまり、難度で高得点を出すには、これらの決まりに沿って行うことが求められよう。言うならば、身体の要素はより機械的に行うことが高得点に繋がってくる。

このように、身体の要素をより明確かつ機械的に行うようになったのは、シドニー・オリンピック大会(2000年)後誕生した採点規則からである。その採点規則の特徴は、演技要素の中でも難度要素を重視したものへと変わった点である。採点規則がこの時変った理由として挙げられるのは、1人のロシア選手の存在がある¹⁹⁾。

その選手は、柔軟性に優れ、新体操王国ロシアにとって、世界新体操の女王に最も近い選手であった。そこで、その当時、新体操界の話題を集めたその柔軟性が高得点に繋がる採点規則へと変更された。言い換えると、ロシアが勝つための手段とも捉えられよう。これは、競技全体を見渡すことが出来ていないことと考えることができ問題である。だが、その選手には何の問

題もない。なぜなら、こうした採点規則改訂が起こることは、新体操の技術が向上、発展を遂げる時、通らなければならない道だったと推測される。しかしながら、採点規則改正に伴って身体の要素は、人間の極限を超えた動きが多くなり、他競技からは高度過ぎる演技要素に対して違和感を植え付けさせている²⁰⁾。

またもう1つの難度とされる手具操作の要素は、その名の通り手具を用いた動きを示し、リスクといわれる高い投げ技中に視野を失う回転（前転など）をすることや、手具の特徴を活かした操作のことを示す²¹⁾。これらは北京・オリンピック大会（2008年）まで、芸術評価に組み込まれていたが、手具操作が徐々に高度になり、芸術というよりも技術によって生まれるものであるとされ、2009年採点規則から難度項目に分類された。このことによって、手具操作は難度項目として評価されることになり、さらなる問題点が発生した。それは、以前まで手具操作は7点までとされていたものが、2009年採点規則からは、最高10点までの手具操作をすることが許可された。つまり、更に難しい操作を数多く演技する必要性が生じた。事例としては、手具に集中することに時間がとられ、曲（伴奏音楽）を感じて踊る余裕がなくなるといった現象である。また、ただ申告した内容（演技要素）を演技するだけ、すなわち機械的な要素（演技要素）の羅列が増加している。これは、本来の新体操の素質である音楽との調和を損なう行為であり、望ましい現象ではない。

こうした3要素が誕生するまでの採点規則は至ってシンプルなものであった。例えば、2004年以前の新体操は、実施と構成の2つから採点されていた。実施は、現在の採点規則と考え方は同じで、投げ技の取り損ねや、技の熟練度を図るものである。いわば、ミスをするごとに減点されるといった安定性を見極めるものであった。そして構成では、決められた演技要素が演技に入っているか、その技術は難度として認められるかを判断するものであった²²⁾。このように、現在の採点規則と比べ、決まりごとが少ないのが特徴である。それにより選手は、現状よりも伸びやかで、個性豊かであった。

しかし、その採点規則のもとでは、本論のねらいで示したように、満点を出す選手が増えたという問題があった。満点が多発することで、競技スポーツの特性でもある順位を付けることが困難になった。その問題を是正するという意味で、採点し易い演技（難度）要素を中心に採点規則が改訂されたのである。

このように新体操は、様々な経緯を得て採点規則が改訂され、今日に至っている。どの改訂にもいえることは、統一性に欠けているということである。換言すると、ことばの定義が十分なされていないまま、また

それらが相互の関係を深く考えないまま採点規則の改訂作業をしてしまったことである。筆者は、本研究を進める中で改訂作業に携わっている人たちが、その時々それぞれの気分や憶測だけで採点基準を作成していたのではないかとさえ感じるほどであった。したがって、ここでは特に客観的な立場で新体操の3要素を捉えていく必要がある。

一般的に難度とは、「むずかしさの程度」²³⁾のことである。この概念は、主に体操競技で使用されたものであるが、後の競技化された新体操でも使われるようになった。つまり、難度ということばは演技要素に与えられた価値点のことを意味しているということである。したがって、新体操の難度要素で必要とされるのは、難しさの程度を見極める能力である。そして、そこでの評価は、演技要素の形（フォーム）が整っているかどうかによって判断されるべきである。しかし、新体操界ではこのように難度のことを「むずかしさの程度」と捉えきれていないところに問題があるといつてよいであろう。つまり、難度のことばの定義に誤りがあるのだ。たとえば、新体操界では、身体の要素として記載されている絵のことを難度といっている。それは、確かにむずかしさの度合いの基準を表しているのだが、難度ではない。いうならば、それは演技要素として考えるべきである。なぜなら新体操の評価は、難度、芸術、実施の3要素から構成されているからである。つまり、演技として行われる要素1つ1つがこれら3要素のいずれかに関連するものであるということだ。したがって、「演技要素」のことを難度といってしまうと、そこに優れた芸術性があったとしても芸術評価の対象とされない危険性がある。ここでは、こうした難度という概念の定義を前提に、改めて新体操の難度について考察を深める必要がある。

上述のように、難度は「むずかしさの程度」を意味することばであるが、体操界ではこの難度を決定する際、何を根拠にしているのであろうか。滝沢²⁴⁾は、ある対象が難しいと実感することはその対象を達成しようとする主体のもつ達成課題と深く関わっているとしている。つまり、それは演技要素とその要素を演じる選手との関係を意味しているということである。更に、換言するなら、演技要素が難しいかどうかはそれを演じる選手の達成課題意識にかかっているということである。そして、その課題を達成するのは選手の「からだ（肉体）」である。この「からだ」が柔軟性に乏しければ、柔軟度を基準に定められた難度に対応することは難しいことであろうが、逆に「からだ」の柔軟性に富んでいる選手にとっては易しいと実感するであろうし、またいとも簡単に演じることができよう。

現状の難度表を見る限り、この「からだ」の柔軟性

に富んでいる選手にとってより有利に働くように整理されているといっても過言ではない。体操は、1-2)で確認したように人の健康を意図して考えられ、発展してきたスポーツである。その体操が更に分化して新体操が生まれ、今日に至っている。その新体操は、音楽と身体動作の調和が織り成す1つの芸術であるといえる。つまり、それはFIG傘下にある7つの種別の中でも最も「美」を強調するスポーツだということである。

その新体操の演技要素が、どの程度の範囲で行われるべきかを究明しなければならないだろう。筆者は、それを求める判断基準として「平和」「幸福」「豊かさ」といった人類が共通して求める理想におかれなければならないと考えている²⁵⁾。現状の採点規則は、その点の配慮が欠けているといえる。更に批判するならば、採点規則そのものに哲学的配慮が欠如しているということである。身体の難度要素は、いつの時代であって人も人類が共通して求める理想に向かっているべきではない。現状の採点規則にはそれが見出せていない。極論すると、高難度要素を重視し過ぎることは、「健康」を害することに繋がるといえる。「健康」でなければ、「平和」「幸福」「豊かさ」にも結びつかない²⁶⁾。したがって、相手に不快感を及ぼす要素は、どんなに難しくとも評価の対象としてはならない。

このような問題を解決するためには、難度評価のシステムを抜本的に改正する必要がある。具体的には、新体操で求められる身体能力（体力）と難度の関係をより理解しやすく整理することである。たとえば、開脚（柔軟性）の上限を180°に定め、そこに達しない場合の評価は「実施」の領域で減点し、そこでの柔軟性を「難度」と切り離して評価するというような考えである。その場合、身体の難度要素が成立しているか否かの認定は、開脚の下限（たとえば120°）を定め、それ以下については身体の難度要素として認めないというようなシステムである。

体力（身体能力）は、「筋力、スピード、持久力、巧みさ、柔軟性を包括させる用語」²⁷⁾であり、あらゆる身体動作の基礎になる力である故、その能力は当然ながら身体の難度要素（身体動作の難しさ）と深い関係にあるといっていようだろう。このことは同時に、採点評価の現場で混乱を招いている重要な要因でもある。混乱の理由のもう1つは、身体の難度要素に限界がないという点である。

したがって、上述のようなシステムの必要性は、採点評価の対象が難度、芸術、実施の3領域に分けて構築されているにも関わらず、その通り採点評価されていないことにある。混乱の一例としては、芸術性の高い選手として定評のあったベッソノワ（ウクライナ）選手の次のようなことが挙げられる：

世界新体操選手権大会個人総合3位のベッソノワ選手の演技を見ると、高難度要素にも関わらず、何かを表現している姿が見受けられる。つまり、高難度要素にも美を追求することは、可能であるということである。だが、それにはリスクが伴う。なぜなら、高難度要素は形（フォーム）が揺らぐことなく行われることで難度点として加算されるが、高難度要素を実施している間に美を表現することは、その行為を妨害することにも繋がるのである。高難度の演技要素で美を表現することは望ましいことではあるが、難度を評価する時に美を持ち込むことはあってはならないということである。

「プラトンによれば、芸術はその本質において具象であり、人の感覚に強く訴えかけるものだった。当然、その芸術作品が美しければ美しいほど、訴える力は大きくなる。更に、芸術は二重の意味で欺瞞的だとプラトンは考えていた」²⁸⁾。つまり美は幻想的である。しかし、新体操の演技要素は幻想的であってはならない。なぜなら、形（フォーム）によって評価されるからである。いわば、難度と芸術は別のものであるということである。しかし、演技要素には芸術が生じる場合がある。この2つの点から理解できるように、ことばがもたらす影響は大きい。これこそが、今日の新体操の芸術が正しく評価されていないという問題と結びつく。

以上のことから、新体操においては、美を損ねるような過度な高難度要素を実施するべきではないという見解に至った。また、それ故にそのようにさせないシステムづくりを急がなければならない。

2) 新体操における芸術と美の関係

芸術とスポーツは、オリンピック運動を通して深い関わりをもっている。近代オリンピック競技大会は、古代ギリシャで行われていたオリンピア祭典競技をモデルにして生まれたものであり、そこでは心身ともに発達した調和のとれた人間を理想としている²⁹⁾。すなわち、スポーツは、心身ともに鍛えるだけでなく、その競技に適した芸術性を持つことが求められているということだ。

新体操は、シンクロナイズドスイミングやフィギュアスケートと同様、採点競技である。それ故に、競技スポーツの中でも芸術性を重視している。しかし、今日の新体操は芸術に対する採点方法で疑問を感じる。例を挙げると、新体操の芸術要素は「観客に感情を表現したメッセージを伝え」³⁰⁾と、採点規則で表現されているが、試合結果（得点）と観客の反応の間には相反する現象が起きている。つまり、ここでの問題は、採点規則で定義している芸術の説明文と芸術得点で予

盾が生じているということである。

新体操が他の評価要素から分離して「芸術」として評価され始めたのは、2001年からである。前項でも述べたが、このときの新体操は、難度を重視した採点規則になった頃である。その採点方法は、新体操が本来目指していた芸術というよりも、手具操作のことを芸術と捉え、呼び名を変えているだけのものではあった。芸術は、手具操作が織り成す難しさを見極めることの意味ではない。芸術に抵抗を感じつつ競技が続行されていたことは、芸術を重視した採点競技としては矛盾が大きく、芸術を見失うことに繋がるという非常に大きな問題として浮き彫りにされたのである。こうした問題を解決すべく芸術評価は、2009年採点規則で大幅な見直しが行われた。

2009年採点規則では、芸術を音楽、総則、手具、身体、プレアクロバット、多様性の6項目³¹⁾から採点されていた。これは、新体操の芸術が評価されるうえで、最も必要とされる音楽と身体の調和や各国特有の文化性が反映され、新体操の芸術として望ましい姿であった。だが、その採点規則が正しく改善されたとは言いがたく、2010年にはプレアクロバットと多様性が芸術減点要素から外れる運びとなった³²⁾。

新体操における芸術の評価は、演技要素のことを難度と表現していることにより、芸術を評価する時に、難度との関係性において行われている。そして、新体操界では、「芸術＝難度」という概念が誤って広く認識されている。つまり、そこでは美ということばの概念を無視したことから、悲劇が起こったということである。更に、そのことにより審判員も真の芸術を知ることがせず評価に携わっているという二重の問題がある。

芸術性で評価されるべきことがどのようなことであるか分からないという点で次のような例を挙げることができる。それは、難度と美の関係で述べたように、演技要素を難度と大きく括ることで、難度要素が3要素の大部分で影響をもたらしていたという点である(ことばの定義)。したがって、芸術の評価にも難度点が反映されていたのである。しかし、これでは芸術、いわゆる美が織り成す本来の意味が受け取り難い。つまり、美は「知覚、感覚、情感を刺激して内的感覚をひきおこすものであり、より必然的、客観的、社会的」³³⁾であるのに対し、今日の新体操では、こうした美の考えを無視した得点が芸術として算出されているということである。

こうした考えを基に出された芸術得点では、得点に差を見出すことができない。むしろ、芸術に定評のある選手が、その他の選手よりも下回るといった結果さえ見られる。当然、観客の反応としては、プーイング

を引き起こす騒ぎとなるのだ³⁴⁾。総括すると、新体操の美が正しく評価されるには、芸術の在り方をどのように伝え、判断し、評価するべきかに掛かっている。したがって、芸術性を評価するとき、身体、手具の演技要素と切り離して芸術が評価されることが要求される。また、そのためには美しいものを美しいと評価できる力を養うことが新体操に関わるすべての人に浸透することが望まれる。つまり、芸術では感受性を持って評価に携わることが大事であるということだ。

芸術は、新体操競技に限らず、定義付けすることは困難極まりない。それは、美に決まりがないからである。偉大な芸術には、無限を志向するものがあり、そこには当然ながら限界はない。つまり芸術は明晰でも明瞭でもありえない³⁵⁾。また、新体操の場合、1つの演技を通して偏りのない演技をすることが重要である。言い換えると、演技全体に芸術点が与えられるものであると考える。

例を挙げると、1つの演技を通して、前半部分に採点規則で定められた身体の要素を全て行い、後半に手具操作の要素を集中させると、演技に偏りが生じる。手具の特徴が前半で生きていないことや、前半に身体の要素を取り入れることにより身体への負担が集中的に起きる可能性は大きいといえる。これは、健康を害する行為であり、そこに美を感じることはできないと示唆する。

更にヒュームは、私たちに期待できる芸術は蓋然性であって、確実性ではないとしている。つまり知識の主体はフィクションといえる。言い換えると「物の美しさは、それを見つめる心のなかに存在する」³⁶⁾と述べている。したがって、ことばや表情よりも心で感じた一瞬の出来事が評価の対象とされるべきである。

そして、芸術の良し悪しは、演じる人が判定するのが良いだろう。人間の体を対象とし、体を動かして踊る人が審判であるともいえる³⁷⁾。簡約すると、演技続けること、または美の本質の探究を欠かさないことが評価する者には必須条件である。また、芸術には決められた動作が含まれないことが好ましいと考えられる。したがって、新体操独自の芸術性を確かなものにしていくといった点からも、美を問いつけることは必要である。そして、このように美を問うことで、芸術は分野によって異なる特徴があると気付ける。

新体操の原点は、「動きの深さと技の高さが織りなす芸術であり、美的表現を生命とする」³⁸⁾。また、優雅な表情も必要であるが、それは内的なものが自然に表れるもので、そこには余裕と美しさが感じられることである³⁹⁾。つまり、こうした新体操の原点を見つめ直し、美への追求を行うことこそ、現在の新体操に足りない点である。

3) 新体操における実施と美の関係

新体操は、美の競技であることを肝に銘じて実施されなければならない。そして、その美しさは、評価するとき時間をかけてはならない⁴⁰⁾。したがって美しさは、演技全体の繰り返し練習の結果、かもし出されるものと捉えることができ、さらに、その演技が発表された瞬間に評価されるものである。

また、美しいものを持つときは、想像力から見出される。いわば、想像力を発揮させるには、人間の体（演技する主体=実施）、芸術制作のための道具（身体、手具、音楽=芸術）、作品のもととなる素材（身体、手具=難度）といった3要素は欠かせない⁴¹⁾。ようするに採点競技においては、先ず審判員自らの想像力を豊かにし、美の要素に評価を下すことが必要とされているということだ。

新体操で示す実施を評価するには、ミスを見極めるものであり、美しくないものを見るといった発想もできる。なぜなら、新体操で示す実施項目の採点項目が、音楽と動き、身体の技術、手具の技術、各手具の基礎技術の4項目に分類されているからである⁴²⁾。その採点方法は、「そのつどそして失敗した要素ごとに減点される」⁴³⁾。いわゆる実施は、減点方法によって成り立っている。すなわち、新体操の実施要素は、美しさとは何かを知った上で、美しくないものに評価を下さなくてはならないということである。

広辞苑で表している実施は、計画的に実際に施行すること⁴⁴⁾とある。ようするに、実施で高得点を得るためには、スポーツ競技であれば繰り返し練習を行うことである。総括すると、瞬間的にミスを見極める力が、実施審判員には求められる。更に選手の立場では、計画的に実施できる力を身につけることが、実施項目で高得点を獲得できる鍵であるということだ。

これらのことからはっきりいえることは、新体操における実施の採点は、その時の出来栄によってなされるものであるということだ。そのため、実施項目に対することばの見直しはしなくてよいだろう。だが、演技要素の評価方法が、実施は実施だけで評価されなければ、ことばの定義が成されていようとも実施要素の意味を持たなくなる。

4) まとめ

今日の新体操は、難度、芸術、実施が混ざり合って評価されている。その中でも、難度ということばの影響力は大きなものであった。換言すると、我々は知らぬ間にことばによって混乱（問題）を招いていた。これを回避するには、ことばの整理をすることが先決である。

美は問題の所在でも示した通り、「必然的、客観的、

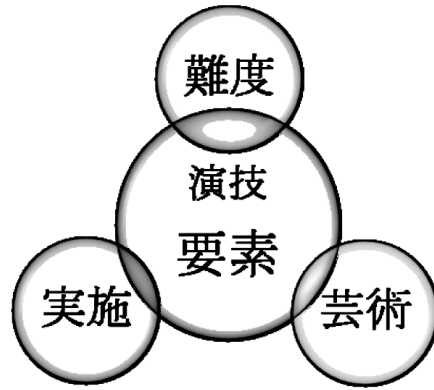


図1 理想の採点。難度、芸術、実施がそれぞれの演技要素として評価されることが理想である。

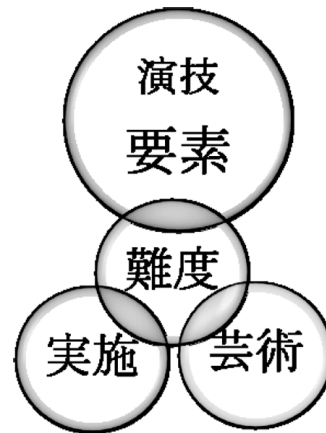


図2 現在の採点傾向。3要素が評価基準にあるにもかかわらず難度要素によって演技が評価されていることになる。このことは、難度要素ができなければ実施や芸術も評価されないことになる。

社会的」⁴⁵⁾である。このことから、新体操における美とは、大胆にして繊細であり、感動を多くの人に伝える表現方法であると解釈できる。なおかつ、美は瞬時に起きるものであり、予測不可能なものといえよう。言い換えると、美を判断するのは困難極まりないこともいえる。

規則をつくるうえで最も必要とされるのはことばの意味を正しく理解することである。つまり、美に関する定義付けを試みるのが近年の採点規則づくりで求められるということである。

美は、新体操に限らず誰かに感じられるものであり、それは抽象的なものだといえる。そして、それは同時に「美は証明不可能なもの」⁴⁶⁾であるということだ。したがって、評価する人（審判員）は美について絶えず味わって学ぶ姿勢を持つことが必要である。たとえば、技術が優れている選手を観察して技術の理想像を認識することや表現力のある選手から芸術性を学ぶことなどである。これは、抽象的な表現であるともいえるが、学ぶことは知識や技術を習得することであり、そこに

は生きるすべをもたらずともいえる⁴⁷⁾。

今日に見られる新体操の問題が解決し得ないのは、議論、討論することを避けているからではないかとさえ思われる。現状のように難度要素が芸術や実施を採点する際に影響を及ぼしていることは大きな問題であるといわねばならない。なぜなら、難度は新体操において芸術や実施と同じように評価の3要素の1つとして独立しているからである。よって、図1のように採点区分を明確にし、難度は難度、芸術は芸術、そして実施は実施と区別して採点されるべきである。

4. 結 論

本論のねらいは、新体操がリズムと芸術性を殊更重視しているスポーツであることを明らかにすることであった。そのことを明らかにする方法として現状の採点規則の問題点を探った。

採点規則によれば、新体操における評価の対象は難度、芸術、実施の3要素から成り立っている。このことは、すでに新体操において演技の芸術性が難度と実施と並んで3つの重要な要素であることを示している。しかし、次のような点から採点上混乱を招き、それぞれ3つの評価要素が正しい評価に繋がっていないことが明らかになった。演技構成は、1つ1つの難度要素が繋がって生み出されている故、全ての要素が「難度」と理解されている。このことにより、難度、芸術、実施のそれぞれの「評価要素」が「難度要素」を中心

に機能しているのが実情である。これは、図1で示したような評価の3要素が活かされていないことを意味している。

こうした課題を解決するためにまず、新体操における美の本質を究める必要があった。筆者は、その美の本質を極める糸口の1つとして「物語性」のある演技の実施が重要であると考えた。なぜなら、採点規則の芸術項目に「演技の始めから終わりまで一貫したメッセージにより実施される主題となるべきアイデアによって特徴づけられるもの」⁴⁸⁾と示されているからである。言い換えると、英語表記のRGの要素である音楽と動きの調和が求められているということである。更にいえば、物語性を持つことは新体操が目指す本来の姿であり、そこに新体操における美が存在するということだ。こうした「物語性」を演技に反映させるよう採点規則を詳細に記載するだけでなく、芸術性を損なうような重大な間違いを起こさせないためにも過度な柔軟について上限範囲を定める必要がある。

本来、規則は人生の「楽しさ」や「豊かさ」などの理念に通ずるものでなければならない。この根本原則を踏まえたうえで採点規則を検討すると、「楽しさ」や「豊かさ」などといった人生に必要な要素が採点規則に反映されているか疑問が残る。その理由として現状の新体操がマス・メディアから「新体操らしさ」を競技や結果からも見出せていないという厳しい批判を受けている点が挙げられる⁴⁹⁾。

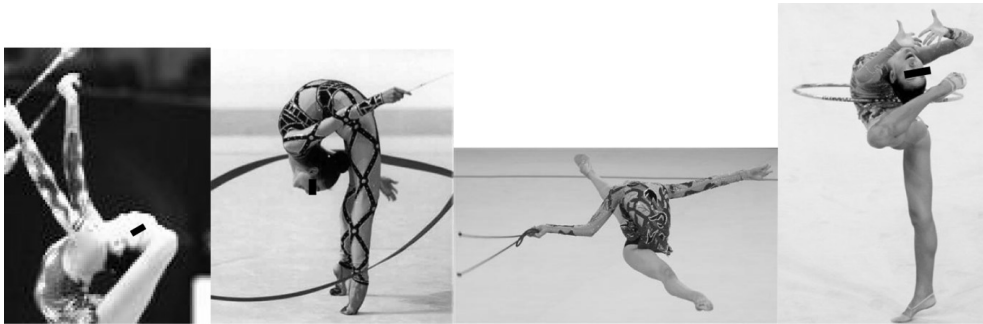


図3 <http://www.naver.jp/>



図4 <http://www.naver.jp/>

本論で考察した結果、採点規則全体が難度要素を殊更重視しているため、採点に偏りが起きていることも明らかにされた。また、その影響をまともに受けている評価要素が芸術要素であるということも明らかになった。

「美は証明不可能なもの」⁵⁰⁾である。また、美は困難で危険な行動のなかにある。それは、力強く、慌てず、冷静な自制心を持ち、常に何かしら美しいということである⁵¹⁾。言い換えると、美は抽象的であるからこそ、抽象的でなければならない。つまり、規則正しく決められた動作に美は生まれえないということである。しかし、それを評価の対象とする時、基準となるものを決める必要がある。たとえば、芸術性の評価については抽象的であり、且つ先に規定されるべきものではない。それ故、評価基準を作ること自体が至難なことである。したがって、芸術を認識できる専門家にその採点を委ねるといようなことの検討も重要である。

5. 図、資料一覧

図3が新体操の写真である。見ての通り人並み外れた柔軟性を写し出している。果たしてこの現象は美しいのか問われる。そして、図4がバレリーナの写真だ。これは新体操に比べると可動範囲（開脚度）は小さいが美しさを感じるといえるだろう。

図3と図4を比べてわかるように、近年の新体操の美はFIGで問題視されている。そして、同連盟のコーチアカデミー一部会長が、2009年3月の同連盟理事会でその報告をした。しかし、その議論が新体操界で発展しなかった。つまり、こうした仮説のもと本研究を進めたのである。

6. 注および文献

- 1) 1998年採点規則では選手の身体能力が発達し、満点に近い選手が多発し始めた。そのためシドニー・オリンピック大会（2000年）以降、評価され易いジャンプ、バランス、ピボット、柔軟といった身体難度要素を主とするものを最高3つまで繋げて行うミックス難度要素と、手具による巧みな操作や技を多く取り込むことが高く評価された。しかし、身体要素を繋げて行うことで足への負担がかかり故障者が増加した。そこでアテネ・オリンピック大会（2004年）後、身体要素を単独とし、数を減らした規則へ移り変わった。だが、上位を目指すほど難度要素1つで高難度要素を演技する必要があり、更に難度重視の評価になった。
- 2) 新体操委員会『2009-2012年採点規則新体操女子』日本体操協会、2009、p.85
- 3) 遠山喜一郎『新体操・上』不昧堂出版、1981、p.19
- 4) 稲垣正浩「ヨーロッパ文化と体操」『体育科教育』第29巻第1号、大修館、1981、pp.40-41
- 5) 湯村久治他編著『最新スポーツ大辞典』国書刊行会、1985、pp.448-452
- 6) 遠山喜一郎『新体操・上』不昧堂出版、1981、p.19
- 7) 野間佐和子『日本語大辞典』講談社、2000、p.502
- 8) アンナ・ベッソノワ選手は、2009年世界新体操選手権大会、2008年北京・オリンピックにて3位の成績を残している。特徴としては、芸術性に優れており、観客からの支持が高い。
- 9) エフゲニア・カナエワ選手は、2009年世界新体操選手権大会、2008年北京・オリンピックにて優勝という華々しい成績を残している。特徴としては、柔軟性に優れており、難度要素に定評がある。
- 10) 2009年6月と9月に委員会で行われた内容を理事会で報告された資料。
- 11) 「日本体操協会」<http://www.jpn-gym.or.jp/>（2003）
- 12) 同ホームページ
- 13) 同ホームページ
- 14) 同ホームページ
- 15) 松井良明『近代スポーツの誕生』講談社現代新書、2000、pp.25-27
- 16) シニアとは、中学3年の4月から12月生まれ以上を示す。
- 17) 身体の必須要素（GOC）とは、各種目異なる難度要素が定められている。ロープトリボン、ジャンプ・ピボット、フープは、全要素。ボールは、柔軟一波動・ジャンプ。クラブは、バランス・ピボット。
- 18) 新体操委員会『2009-2012年採点規則新体操女子』日本体操協会、2009、pp.20-55
- 19) 水野裕子「新体操大国ロシア」『ユーラシア研究』第36号、ユーラシア研究所、2007、pp.38-42
- 20) 新体操技術委員会報告（FIG）
- 21) 新体操委員会『2005年採点規則新体操女子』日本体操協会、2005、pp.1-14
- 22) 新体操委員会『1990年採点規則新体操女子』日本体操協会、1990、pp.23-51
- 23) 新村出編『広辞苑』岩波書店、1991、p.1938
- 24) 滝沢康二「体操競技の難度に関する哲学的検討」『日本体育大学紀要』第28巻第2号、日本体育大学、1999、p.108
- 25) 滝沢康二「スポーツ哲学（体育学概論を含む）」日本体育大学、p.30
- 26) 滝沢康二、同上書、p.30
- 27) 朝岡正雄『スポーツ科学辞典』大修館書店、1993、p.362
- 28) ブライアン・マギー、中川純男訳『知の歴史：ビジュアル版哲学入門』BL出版、1999、p.29
- 29) 特定非営利活動法人東京オリンピック・パラリンピック招致委員会、『未来と結ぶオリンピック』東京都/財団法人日本オリンピック委員会/特定非営利活動法人東京オリンピック・パラリンピック招致委員会、2008、p.18
- 30) 新体操委員会『2009-2012年採点規則新体操女子』日本体操協会、2010、p.61
- 31) 新体操委員会、同上書、pp.85-89
- 32) 新体操委員会、同上書、pp.61-63
- 33) 新村出編『広辞苑』岩波書店、1991、p.2131
- 34) 2009年世界新体操選手権において、芸術性に定評の高いアンナ・ベッソノワ選手の演技終了後、観客から「ベッソノワ選手コール」が起きた。しかし、点

- 数は思ったより伸びず、ブーイングが発生した。
- 35) ブライアン・マギー, 中川純男訳『知の歴史: ビジュアル版哲学入門』BL 出版, 1999, p.119
- 36) ブライアン・マギー, 中川純男訳, 同上書, pp.112-113
- 37) ブライアン・マギー, 中川純男訳, 同上書, p.25
- 38) 遠山喜一郎『新体操・上』不味堂出版, 1981, p.22
- 39) 遠山喜一郎, 同上書, p.22
- 40) アラン, 長谷川宏訳『芸術の体系』光文社, 2008, p.50
- 41) アラン, 長谷川宏訳, 同上書, p.526
- 42) 新体操委員会『2009-2012年採点規則新体操女子』日本体操協会, 2010, pp.64-66
- 43) 同上書, p.64
- 44) 新村出編『広辞苑』岩波書店, 1991, p.1150
- 45) 新村出編, 同上書, p.2131
- 46) アラン, 長谷川宏訳『芸術の体系』光文社, 2008, p.17
- 47) 佐藤学「学びの快樂」世織書房, 1991, p.4
- 48) 新体操委員会『2009-2012年採点規則新体操女子』日本体操協会, 2010, p.62
- 49) 2009年5月に行われた, 世界選手権日本代表決定競技会において, 代表入りを惜しくも逃した選手に対して, マス・メディアは, 高い評価を下した。つまり, 良いとされる選手が結果では, 評価されていないのが現状である。
- 50) アラン, 長谷川宏訳『芸術の体系』光文社, 2008, p.77
- 51) アラン, 長谷川宏訳, 同上書, pp.17-77

<連絡先>

著者名: 浦谷郁子

住 所: 東京都世田谷区深沢 7-1-1

所 属: 日本体育大学体育原理研究室

E-mail アドレス: ikuko_u5ikuko_u5@yahoo.co.jp